

講演録

厳島神社の歴史と魅力



2017年度
FUJITSU ファミリー会 秋季大会
特別講演

県立広島大学人間文化学部教授
(元 宮島学センター長)

秋山 伸隆 氏

profile

あきやま のぶたか 1953年鳥取県生まれ。1975年広島大学文学部史学科卒業。同大学大学院文学研究科博士課程を経て、広島大学文学部助手、広島文化女子短期大学助教授、広島女子大学国際文化学部教授等を歴任。現在、県立広島大学人間文化学部教授(日本中世史)。元 宮島学センター長。『戦国大名毛利氏の研究』『宮島学』など著書、共著多数。

● 厳島神社の歴史

県立広島大学は3つの県立大学を統合し、2005(平成17)年に開学いたしました。その翌年から文部科学省の支援プログラムとして、「学生参加による世界遺産宮島の活性化」という事業を3年間続け、2009(平成21)年4月、その事業の成果を継承・発展させるために学内に「宮島学センター」を設置いたしました。センターでは専任や併任の教員それぞれが専門の研究や授業

を展開し、宮島の歴史的・文化的価値を高めるとともに、公開講座などを通して地域社会の活性化や観光振興に貢献するための活動しております。

厳島神社は、推古天皇元年の593年に創建されたと伝えられております。祭神は、市杵島姫

命(いちきしまひめのみこと)、田心姫命(たごりひめのみこと)、湍津姫命(たぎつひめのみこと)で、2017年に世界文化遺産に登録された福岡県の宗像大社と同じ航海の安全を守る海の神様です。厳島神社という名前は、811年の『日本後紀』に記述されている「伊都岐島(いつきしま)」が初出といわれております。「斎(いつき)(=神に仕える)島」が語源とされ、古くから島そのものが信仰の対象になっていました。その後、安芸国一宮として最も重要な神社の地位を確立していきます。

現在のような規模の海上社殿は平安時代末期、1168年から2年をかけて平清盛により造営されたもので、

神社には「平家納経」はじめ、平家縁の貴重な品々が伝えられております。厳島神社は、鎌倉時代に2度にわたって火災にあい、大きな被害を受けましたが、記録によると清盛の時代の社殿を忠実に復元し再建するという形で現在まで至っております。

最も重要な本殿は、戦国時代にこの地域を支配していた毛利元就によって再建されました。本殿再建には相当な費用がかかったのですが、その費用は毛利家が管理していた石見銀山からの収入で賄われました。神社には毛利家の家臣が奉納した重要文化財にも指定されている舞楽の衣装や、石見銀山の銀で作られたと推定される狛犬などが収められております。島根県の世界文化遺産である石見銀山と厳島神社のこのようなつながりは、まだあまり知られていないことです。

● 海上社殿を維持する工夫

厳島神社の特徴は何と云っても、海の上に建てられた社殿です。当然ながら、高潮や台風、塩害の被害は必至ですので、修繕することを前提に建てられたといっても過言ではありません。社殿の沖合200mほどの海上に立つ有名な「大鳥居」も、これまで台風や落雷によって大きな被害を受け、現在のものは1875(明治8)年に再建された8代目です。2本の太い樟(くすのき)を主柱として立つこの鳥居は海底に埋め込まれているのではなく、海底に作られた土台の上に乗っているだけです。鳥居の一番上にある「笠木」「島木」と呼ばれる箱状の構造になっている屋根のような部分に石や砂利がぎっしり詰め込まれ、総重量約60トンと推定されるその重みで自立し、風や波に耐えながら立っているのです。

大鳥居や社殿の海水に浸かって傷んでしまった部分は、切り取って新しい柱に取り替える「根継ぎ」という工

事を行いながら維持されています。朱塗りの美しい廻廊も厳島神社の魅力のひとつですが、この廻廊の床板は、板と板の間にわずかなすき間が空いています。これは台風や高潮で海面が上昇したときに社殿が持ち上げられることを防ぐ独自の工夫です。このすき間は、上昇してきた海水を逃がすほか、壁がない廻廊に吹き込んだ雨水を下に落とす働きもあったと思われます。その長い廻廊に囲まれるようにして立つ能舞台は、世界でただひとつの海の上に浮かぶ能舞台として高い人気を誇っています。

歴史ある神社であり有名な観光地といえども、天候によっては参拝を中止しなければならないときもあります。厳島神社はこのような過酷な条件の下で、その美しさを守っているのです。

● 軍事の重要拠点だった宮島

戦国大名の毛利元就が中国地方を支配するきっかけとなったのが、1555(弘治元)年の厳島合戦です。その舞台となった宮島は、広島湾の西側の入口を押さえる場所にあり、軍事的にも経済的にも極めて重要な場所でした。「松島」「天橋立」と並ぶ日本三景として知られる宮島は、実は戦争と深くかかわってきた場所でもあります。毛利輝元が築城した広島城は非常に広い範囲を占めており、廃藩置県後、ほぼすべてが陸軍第5師団の本拠地となりました。さらに、呉には海軍の拠点となる呉鎮守府が設置されました。広島と呉を防衛するために広島湾一帯には要塞が築かれ、宮島にも砲台が3カ所築かれました。

今では高校野球の応援などで有名になった広島しやくしの杓子ですが、もともとは広島しやくしの宇品港から出征する兵士たちが、出征の前に「武運長久」と書いた杓子を千畳閣ちよじやうかくの柱に打ちつけていったのが始まりといわれております。「飯をとる」杓子に、「敵を召し捕

る」という言葉をかけて奉納したと伝えられています。

厳島神社と原爆ドームは、1996(平成8)年、同時に世界文化遺産に登録されました。同じ広島県内のわずかな範囲に2つの世界遺産を持つことは全国でも珍しいケースだと思います。平安時代の建造物と第二次世界大戦を物語る建造物。全く関係がないように思えますが、実は意外なつながりがあるのです。

原爆ドームは1915(大正4)年に広島県物産陳列館として、チェコ人の建築家、ヤン・レッツェルの設計により開館しました。レッツェルは、宮城県にあった松島パークホテルも設計しており、このときの宮城県知事に気に入られ、彼が広島県知事に転任した際、広島県物産陳列館の設計をレッツェルに依頼したといわれています。さらに、レッツェルは宮島にあった宮島ホテルも設計しました。このホテルは多くの外国人たちに利用され、戦後は占領軍の保養施設として接收される中、1952年、残念ながら火災で焼失してしまいました。もし残っていたら、宮島と原爆ドームのつながりを示す貴重な建物となっていたはずでした。

● 世界とつながる遺産

厳島神社は、海外の世界遺産ともつながりを持っております。日仏交流150周年を記念してフランス政府が作成したポスターに、厳島神社の大鳥居とモン・サン＝ミシェルがデザインされています。どちらも宗教上の聖地であり、海に囲まれた世界文化遺産です。モン・サン＝ミシェルはご存じの通り教会ですが、フラン

スとイギリスが戦った百年戦争の際には要塞に変わりました。信仰の対象である宮島もモン・サン＝ミシェルも、戦場だった時代を乗り越えてきたのです。さらに興味深い共通点として、戦時に島を守るための手段として、どちらも「水」を備えていたことが挙げられます。島ですから真水を確保することが非常に難しい。宮島には今でも江戸時代に掘られた井戸が何カ所も残っています。大きな川がありませんから、井戸の水が人々の命の綱でした。厳島合戦当時は、人々は雨の水や小さな川から水をくみ水瓶にためて家に備えていた



ようです。毛利氏は厳島合戦の数カ月前から命令を出し、宮島の人々の家から水瓶を徴発して、城に運ばせたということが資料として残っております。モン・サン＝ミシェルも貴重な水を確保するために、戦時中は巨大なプールのような貯水槽が作られ、イギリス軍の攻撃に備えていたということです。水を絶たれた城は一日か二日で降伏することがあるくらい、戦争の際には水は非常に重要なものだったのです。

2018年は、平清盛生誕900年という節目の年に当たります。これを機に、さらに多くの皆様に、世界文化遺産の宮島、厳島神社の魅力をご堪能いただければと思っております。